第２６７回鳥取県内水面漁場管理委員会

１　日　時　平成２９年２月６日（月）　午前１０時４０分から

２　場　所　鳥取県庁第１２会議室
　　所在地：鳥取県鳥取市東町１丁目２２０番地

３　出席者　委　員：寺﨑健一委員、竹内哲郎委員、絹見康孝委員、水谷由香里委員
　　安藤重敏委員〔会長〕、川原三紀子委員、番原昌子委員、
　　西本ゆかり委員
　　事務局：平野誠師局長、氏良介次長、田嶋輝一書記
　　鳥取県：農林水産部水産振興局　小畑正一局長
　　水産振興局水産振興室　草野雅昭室長
　　水産振興局水産課　渡辺秀洋漁業調整担当係長
　　難波克典漁業調整担当係長

４　傍聴者　　なし

５　議事
（１）鳥取県内水面漁場管理委員会の概要について（報告事項）
（２）会長及び会長職務代理者の選任（協議事項）
（３）内水面漁業の概要について（報告事項）
（４）平成２９年度鳥取県の水産振興策について（報告事項）

６　その他

議事の経過及び結果

定刻となり、平野事務局長が開会を宣言し、小畑水産振興局長が委員に辞令交付を行った。小畑局長の挨拶のあと、各委員、県水産課、事務局職員が自己紹介を行い、平野局長の議事進行により、議事に入った。

議事（１）鳥取県内水面漁場管理委員会の概要について（報告事項）
平野事務局長が資料に基づき鳥取県内水面漁場管理委員会の概要について説明した。

議事（２）会長及び会長職務代理者の選任について（協議事項）
［会長に安藤委員、会長職務代理者に寺﨑委員がそれぞれ互選された。］

〔平野事務局長〕
　会長・会長職務代理者の選任は委員会の規程により、互選となっている。まず委員の皆様のほうから、立候補はあるか。
〔寺﨑委員〕
　執行部案があれば説明を願う。
〔平野事務局長〕
　事務局からは、これまでの経歴等を考慮し、安藤委員を推薦するがいかがだろうか。
〔全委員〕
　（拍手）
〔平野事務局長〕
　皆様から拍手を頂いたので、会長は安藤委員にお願いする。
　続いて、会長職務代理者の選任についてだ。これまでは漁業者代表から就任をしてもらっている。昨期までは西部の方にお願いをしていたので、今回は東部の寺﨑委員にお願いしたいが、いかがだろうか。
〔全委員〕
　（拍手）
［平野事務局長］
　皆様から拍手を頂いたので、会長職務代理は寺﨑委員にお願いする。
〔安藤会長〕
　当委員会、大変責任の重い委員会なので、その重責に耐えられるかどうかわからないが、精いっぱい務めさせていただく。よろしくお願いする。

議事録署名人の指名
〔寺﨑委員、竹内委員が今回の議事録署名人に指名された。〕

議事（３）内水面漁業の概要について（報告事項）
水産課渡辺係長が資料１に基づき、内水面漁業の概要について説明した。

〔安藤会長〕
　意見や質問をお願いする。
〔絹見委員〕
　外来魚の再放流について伺う。当委員会でこれを取り締まることはできるのか。
〔渡辺係長〕
　委員会指示で外来種の再放流を禁止している。生態系保護のため指示をしているが、このことを知らない方も多いので、周知につとめている。
〔番原委員〕

委員会指示とは違う話だが、特定外来法にも移動制限についての規定がある。
〔絹見委員〕
人為的な移動の制限はできるだろう。ただ、サイズの小さい外来種は柵をくぐり抜けて勝手におりてくるのでこのことにも留意してほしい。
また、近年フナが少なくなってきた。外来種の影響か、もしくはスズキが近年よく獲れるので、これらの魚が捕食してしまうのだと思う。
〔寺﨑委員〕
外来種については、智頭のダムでも問題になっている。それを受けて、千代川では電気ショッカーの許可をもらい、成魚を試験的に獲っている。PR も必要だろうが、そういう施策もあわせてやらないと外来種の数は減らないと思う。
〔水谷委員〕
今の話の補足である。西高尾ダム、東郷ダムにもブラックバスが入っているようだ。また、由良川の上流部、中流部、そして瀬の周りが田んぼばかりのところで、ルアーを持った釣り人がうろうろしているという話を聞いたことがある。
〔平野事務局長〕
外来魚について補足説明を行う。ブラックバスは、スポーツフィッシングという観点から、非常にもてはやされた時代があった。しかし、これが既存の生態系に影響を及ぼすということは明らかなことである。漁業権がない多鯰ヶ池では外来魚の撲滅に向けた動きがあるところだが、漁業権のある３河川・２湖沼については、他の魚への影響もあり、駆除を自由にできないということがある。１０年以上前は外来種駆除の取り組みもあったが、最近は少なくなってきている。この外来魚再放流禁止に係る委員会指示を初めて発出した頃は、内水面漁協から相談を受けて、県の方で取り締まりの方々と一緒に、持ち込んだ人や再放流した人を特定し、聞き取り調査を行ったこともある。この委員会指示というものは、すぐにその人を捕まえて送致する、検挙するということはできないが、命令を知事が出して、その命令を守らない者について取り締まっていくという手続になっている。何としてもこのブラックバス、ブルーギルの被害がこれ以上広がらないよう、しっかりとした対応をする必要があると考えている。
〔安藤会長〕
そういう対策についても当委員会で諮問を受けるのか。
〔平野事務局長〕
新たな制限をかける場合には、当委員会で検討することになる。実際の駆除等について事業としてやっていく場合は、それぞれの関係部署、担当市町村でやっていくことになる。
〔番原委員〕
先ほどの話は、漁協絡みの関係の話だと思うが、外来魚の関係だったら、外来生物法が適用されると思うので、持ち込んだ者が明らかであれば、そちらの法律の適用が考えられる。
〔平野事務局長〕

明らかに外から持ち込んだ場合には、確かにそうである。
〔安藤会長〕
いろいろな関係法令も鑑みて、いろいろ対処を考えていただければと思う。

議事（４）平成２９年度鳥取県の水産振興策について（報告事項）
資料２に基づき、平野事務局長、草野室長が水産振興策について説明した

〔安藤会長〕
　御意見、御質問をお願いする。
〔番原委員〕
　日野川の源流と流域を守る会の総会で必ずアユの話が挙がってくる。アユの減少の原因は、雪のときにまく塩や米づくりの際の農薬ではないか言われるが、根拠はない。このたび、調査をするということだが、その調査内容を日野川の源流と流域を守る会事務局にお伝えいただくことはできるか。また、今年度は難しいかもしれないが、来年度、先ほど話が挙がった外来魚関係の実態調査をしていただくことは可能か。
〔平野事務局長〕
　アユの減少原因には、さまざまなことが挙げられている。その中にはアユが食べる藻の付着が悪くなったことがあるが、その原因として、今言われた除雪のときに使われているものだとか、あるいは、農薬ということも確かに言われている。あるいは、泥が流れてきて、泥が石につくから餌がなくなるとか、生息環境としても、昔は連続していた瀬とか自然のふちが減少し、単調になったといったことも言われている。さまざまな原因が考えられるゆえ、一度に全ての原因を解明することはなかなか難しい。しかし、少しでも原因を解明し、対策につなげられるよう調査にかかるつもりである。その調査内容については漁協と相談をし、調査結果については関係者にしっかりと公表していくという前提で考えている。また、海に生息している流下仔魚の餌環境がどうなっているのか、個体数がどうなのかといったようなことは、この冬の間もちょうどやっているところである。その体制も県としてしっかりつくっていこうと考えている。
〔番原委員〕
　年数がかかるかもしれないが県が調査にかかるということを守る会で話しても大丈夫か。
〔小畑局長〕
　大丈夫である。ただ、おそらく平成２９年で結果が出ることはないと思うので、調査は何年間か行う予定だ。結果がわかったときは当然御報告させていただく。
　話題が変わって、外来種の関係である。３大河川全てについて、県の職員だけで調査をするのは、現実的に難しい。本日お集まりいただいた漁協にも、ぜひともこの辺の調査が必要であれば、御協力いただきながら、やらせていただけたらと考える。
〔竹内委員〕

日野川のブラックバスについて、昭和５０年ごろ俣野にできた発電所の揚水が入るところに、ブラックバスが放されたことがある。放してから何年か経つと、大きなもの小さなものが釣れだし、初めはみんな喜んで釣っていた。最近は釣り人を見たことがない。ひょっとしたら絶えているかもしれない。

〔番原委員〕

水が冷たくて死んでしまうのではないか。

〔竹内委員〕

何年かは生きていた。１年や２年ではない。それから同時期に、黒坂の鵜ノ池でもブラックバスが釣れだしたことがあった。菅沢ダムでも釣れたことがある。ちなみに外来種は本流ではほとんど釣れない。今でもブラックバスが獲れたという話はあまり聞かない。

〔小畑局長〕

今御意見いただいたように、漁協の持っておられる情報もいただきながら、我々のほうも一緒にできることはやっていきたいと思う。ちなみに天神川の状況はいかがだろうか。

〔西本委員〕

５年程前にそのような話を聞き、ボートを出して網で捕獲しようとしたことがある。しかし、成果はなかったので、実際にいるかどうかは不明である。

〔水谷委員〕

天神川というのは、小鴨川ではなくて、三朝の方の天神川のことか。

〔西本委員〕

そうである。

〔水谷委員〕

三朝ロイヤルホテルの下のところの川と、温泉街の三朝大橋の下の２カ所での外来種情報を聞いている。下のほうは怪しいが、上のほうは恐らくニジマスではないかと思う。ところで中津のダムでの外来種情報はあるか。

〔西本委員〕

ない。

〔水谷委員〕

尋ねはしたが中津ダムは水温的に難しいかもしれない。イワナとかがいる水温なので、ブラックバスには水温が低すぎると思う。温かい要素があればいいが、常に雪が１メーターぐらいあるところなので、入れてないのではないかという気はする。

〔安藤会長〕

菅沢ダムでは、私も５年ごとに調査に入っているが、ある時期からぱったり少なくなった。その原因を考える中で、渇水期が２年続いた時期があった。ブラックバスは夏前に深さ１メートルとか２メートルぐらいの砂利浅場に産卵をする。ちょうどその時期が渇水期で、水面が１０メートルぐらい下がったことがあった。そうすると、産卵した卵が渇水期で水面上に露出し、ふ化しないということがある。このような繰り返しが若干あるのでは

ないかということで、菅沢ダムにブラックバスはほとんどいない。ただ、下流平野部の用水路では、まだまだ入れているところもあるので、本川よりもやはり周辺、中小河川、用水路、緩流域での増加が心配だという声もある。

〔川原委員〕
　魚道について。緊急性の高いところから整備する方針だが、今年度は何カ所整備するかということは決まっているか。
〔小畑局長〕
　取り急ぎ、予算的には１つ整備する予定だ。現在、各漁協にどこの魚道の緊急性が一番高いかということを照会している。新しい年になったら、新たに検討会を正式に立ち上げてもらい、優先順位についてもお話しいただきたいと思う。予算的には１つだが、必要であれば補正という形ででも、予算のつくようなことを考えていきたい。
〔川原委員〕
　新聞記事によると、たくさん必要なところがあるそうだが、取り急ぎ１基ということか。
〔小畑局長〕
　下流からやっていかないと意味がないということもあるので、取り急ぎ１基は頭出しということで御理解願いたい。

〔川原委員〕
　湖山池のシジミの繁殖についてである。湖底のことについては手が打ってあると理解した。塩分調節に係る堰の開閉について、夏場に塩分濃度の関係でシジミが死んでしまうというような、心配はないだろうか。
〔平野事務局長〕
　まず、シジミの増殖関係でいうと、万人が納得している塩分濃度というものはない。ただ、一般的に、水産の研究者の間で言われているのは、塩分濃度というよりは、６、７月ごろの産卵期に、シジミが卵を持っていても、刺激があり産卵誘発があって初めて出てくるということがある。その産卵誘発として塩分濃度の上昇が必要だと言われており、それまでの２，０００とか３，０００から、１，０００ぐらいふえるような形の塩分濃度になると産卵が誘発されると言われている。塩分濃度をシジミのために、東郷湖漁協も今言った形で調整がされているが、３，０００や４，０００にしないといけない、あるいは６，０００や７，０００にしないとシジミがふえないということでは決してない。しかしながら、一部の漁業者の方々は、やはり５，０００程ないと、シジミが増えないと言われている方もいらっしゃる。水門操作に関しては、ビジョンの中では２，０００から５，０００ということにしている。その範囲内で、塩分というよりはＤＯ、溶存酸素のほうが、やはり生き物に与える影響が大きいので、貧酸素域にならないよう水門操作や水質の管理が行われている。

〔絹見委員〕
　水温が上がると低酸素になるので、水門調整はマニュアルをつくって行うことになった。また、東郷湖には酸素量を自動で調べる装置があり、データが組合に入ってきて、場所毎の酸素量や濃度が幾らだということが分かる。それも参考に水門管理者が調整をしている。
〔安藤会長〕
　何カ所かに、深さごとの温度、水温、溶存酸素やｐＨ、塩分濃度を自動的に記録する装置が設置されており、集計されたデータは担当者が年間ずっと記録している。水門操作は水門の近くの方にお願いし、開ける大きさだとか入れる海水の量も調整しながらやっている状況である。

〔寺﨑委員〕
　アユの緊急回復試験のところの冷水病対策について、前倒しと書いてあるがこれについて聞きたい。
〔平野事務局長〕
　これは１つの意見として検討してみようかということだ。冷水病の菌を持ったものはどうしても出てくるので、発病水温度の十七、八度になる前にある程度獲ってしまうというふうなこともできないのかということを言う意見を参考にした。
〔寺﨑委員〕
　私が聞くのは、水温が低いときに出るから、高くなってから遅く放流したほうがうまくいくという意見である。
〔平野事務局長〕
　そういう全く真逆の意見も承知している。両方の意見をよく聞き、アユが増えるのはどの案かということは、これから検討していく。

〔竹内委員〕
　冷水病関係でもうひとつ。６月１日から川は解禁となり、そのころに結構獲れるところである。ところが、７月に入る前に水温が十七、八度になってくると、冷水病が出て獲れなくなってくる。日野川では養殖をしているので、５月のある時期にアユがおりてきている。その段階で県外の人などに来てもらい、そちらで獲ってもらうというのはいかがだろうか。それから、冷水病が出やすい日野川のほうの奥のほうには幕を張っている。
〔安藤会長〕
　アユの解禁日については、日野川さんだけの問題ではないので、県内の３大河川の漁協と、これから調整をしながらいろいろ検討している段階だと思う。
〔平野事務局長〕
　そうだ。

〔安藤会長〕
　去年も一昨年もアユの不漁が続いている。各県の様子も聞いてみると、日本海側の府県のアユの漁獲量が軒並みダウン、鳥取県だけではないということを聞いたが、その辺の情報はいかがか。例えば山口県から石川県、富山県ぐらい。
〔小畑局長〕
　一昨年は総じて日本海側で不漁だった。去年は日本海側に限らず、九州も含めた西日本で不漁だったと聞いている。なので、会長がおっしゃるように、鳥取県だけの問題ではなく、海の環境の変化も影響しているのではないかと考えている。例えば、カタクチイワシなどの考えられそうな原因を調査しているが、今のところ原因解明までには至っていない。
〔安藤会長〕
　日本海側の魚関係の先生方の話聞いてみると、やはり海洋の沿岸プランクトンの減少、それから磯焼け、磯場の減少、稚アユの矮小化、体力がない、上がれない。それに暖水の影響で、海水の温暖化の影響で、例えば魚食性の大型魚類も回遊してくる、各河川の河口付近には、そういう魚食性のスズキとかサワラだとかそういうものも含めてたくさん近年見られる。それで、遡上アユ量の減少という、ことも見えてくるという話も聞いた。そうすると、冷水病だけが問題ではないということもあるので、幅広く情報収集とか今後の検討をされる必要があるだろう。
〔小畑局長〕
　この試験、この事業の中で、そのようなことを引き続き調査しようと思っている。

６　その他

〔安藤会長〕
　委員の皆様から御報告、御意見はあるか。
〔水谷委員〕
　漁協にお伺いする。例年のアユ遡上の一番早い時期はいつ頃か。先日、海で釣りをする人に聞いた話だが、水面にざわつきがあったので確認したところ、イルカが目の前を泳いでいったとのこと。この寒い時期に、日本海にイルカが出没して、ある程度のサイズの魚が右往左往している。河口域ではなかったが、時期的には大分河口付近までアユ稚魚が来ているのではないかと心配になり質問した。
〔竹内委員〕
　まだだと思う。
〔寺﨑委員〕
　雪解けくらいではないだろうか。
〔水谷委員〕
　現在雪潮が出ており、水温が下がっているので嫌っているとは思う。

〔寺﨑委員〕
　上がるのは大体３月だと聞いている。
〔竹内委員〕
　米子の場合、王子製紙のところの堰堤で一番早く獲れる。暖かい年になると、３月の末、４月の初めぐらいに、結構上がってくる。しかし、去年は本当に上がってこなかった。
〔絹見委員〕
　中部のアユは、埴見川に天然アユが上がってくる。

〔安藤会長〕
　他に御意見などはあるか。
（特になし）

閉会
事務局長の挨拶をもって、第２６７回委員会は閉会した。

この議事録の真実を期するため、議長及び議事録署名人をして記名、押印させる。

平成２９年３月　日

議長　会長

署名委員

署名委員